

金原瑞人さん

[翻訳家・法政大学教授]



今は、英語で発信することが 大きな意味をもつ時代

通常、ぼくは、翻訳をするかどうか、原書を読み、内容を検討してから決めます。しかし、マララ・ユスフザイさんの自伝『わたしはマララ』は、原稿がまだ手元にない段階で引き受けました。彼女の活動は、インターネットを通じた海外の報道などで以前から知っていて、本の内容にも興味を湧いたからです。

ぼくは大学で英語の翻訳を教えている、これからの社会で英語が果たす役割について関心をもっています。マララさんの件についても、インターネットの力もちろんあるけれども、英語で発信されたからこそ、これだけ世界中に広がり、注目される状況が生まれたと考えています。情報を発信・入手するツールとして、英語は今まで以上に大きな力をもってきていると感じます。

とはいえ、ひとくちに「英語」といっても、英語を母語とする人とそうでない人とは、その質は根本的に違います。英語を母語としない人が自分の考えを相手にわかるように伝えるためには、どんな言葉を使い、どう話せばいいのか、真剣に考えなければなりません。その点で、マララさんの英語は、同じく英語を母語としない日本人の参考になります。例えば16歳の誕生日に行った国連でのスピーチは、飾らない言葉で言いたいことが十分に伝わる好例です。

『わたしはマララ』の 教室での活用法

書店によっては児童書のコーナーにも置かれている『わたしはマララ』ですが、内容は、子どもにとって、少し難しいものになっています。

というのは、パキスタンが、同じアジアにありながらも、日本とは全く違う国だからです。本書には、パキスタンの歴史や宗教、政治システムなどが詳細に書かれていて、理解するのに時間がかかります。実際、翻訳者自身も知らないことが多くありました。

ただ、パキスタンはアジアの中の大切な国のひとつ。子どもたちの関心を向けさせるのはよいことです。小学校で教えるなら、絵本や子ども向けの伝記から入るとよいかもかもしれません。

しかし、絵本だけで背景を知らない場合、ただの「かわいそうな女の子」のお話で終わってしまいます。本書には21世紀の課題のひとつである「貧困と戦争と貧富の差」の問題が集約されています。先生方には、教室で教える前に本書を読んで、マララさんがなぜ「女の子に教育を」と主張しているのかを説明し、子どもたちが世界に目を向けるための教材として使ってもらえたらと思います。

学校が好きな子どもが 増えてほしい

ぼくの小学校時代は、いたって「ぶつう」。成績は中の上で、放課後はドッ

ジボールをし、家に帰った後はテレビを見て、宿題をして寝る。そんな毎日でした。今でこそ翻訳の仕事はしていますが、本は、あまり読まなかったかな。

「勉強が楽しかった」という記憶もありません。友達の中には、「勉強が楽しい」という子もいましたが、ぼくにはその気持ちがわかりませんでした。

だからといって、学業を楽しく教えるかと主張するつもりはありません。きっちり教えればいいと思います。「数学嫌いにさせない」とか「楽しく英語を教える」という言葉をよく耳にしますが、なんの教科であれ子どもによって向き不向きがあるし、勉強はある意味、しんどいことだと思うからです。

学校は訓練・修練の場です。しかし同時に、子どもにとって楽しい場所であってほしいとも思います。

学校には、普通の教室以外にも、図書館や美術室、音楽室など、勉強以外の好きなものと出会えるかもしれない場所がいくつもあります。そんな場所は学校しかありません。

子どもが1日で一番長い時間を過ごすのが学校です。学校は、友達や先生との人間的なコミュニケーションを通して、子どもに幸せな時間を保証する場であってほしいと思います。

ゼミの学生でたまに、小学校時代のことをとても楽しそうに語る子がいます。教える立場として言えば、学校にいる時間が楽しかったと思う子が増えてほしいし、そういう子どもは将来、「学校」を大切にできるようになるでしょう。

PROFILE

かねはら・みずひと●1954年岡山県生まれ。法政大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程単位取得満期退学。非常勤講師等を経て、1998年4月から法政大学社会学部教授を務めている。児童書やヤングアダルト向けの作品のほか、一般書、翻訳書は400点以上。訳書に『豚の死なない日』（白水社）『青空のむこう』（求龍堂）など。エッセイに『翻訳家じゃなくてカレー屋になるはずだった』（ポプラ社）。その他、古典翻案作品『雨月物語』（岩崎書店）などがある。

学校は、子どもに「幸せな時間」 を保証する場であってほしい